

英語多読活動の効果についての一考察

村上真理*

A Study of Educative Effects on English Extensive Reading Practice

Mari MURAKAMI

Abstract

The author has conducted extensive reading practice and presentation of book review in the 3rd grade students' General English class. This paper reports changes in students' attitude toward English through extensive reading practice and students' feedback about writing a book review for a 2-minute presentation.

Key Words: extensive reading, book review

はじめに

今では多読活動、「平易な英語で書かれた本を沢山読むこと」が従来の学校英語教育に不足する英語使用時間を確保する手段としてだけでなく、むしろ自然な英語を体得する、英語を日本語に訳さずに読む習慣を身につける、英語で考える力を養う英語学習法であるとして、さらには外部試験の得点アップや英文読解力や速読力の養成に効果が期待できる学習手段として多くの中学校、高校の英語授業に導入されている。

沼津高専でも平成24年度の後期から1名の教員によって授業に導入されて以来、平成29年度には筆者を含めた3名の教員がそれぞれ担当するクラスで定期的に行っている。そして3年生の授業では多読の活動で養った「英語で考える力」を「英語で発信する力」に繋げる活動としてビブリオバトルを実践している。

ビブリオバトルとは簡単に表現すれば「ゲーム感覚の本の紹介合戦」、「書評を媒介としたコミュニケーションの場作り手法」であり[1]、発祥は大学の研究室ではあるが、適応範囲が広いので利用される目的も場も多様であり、高校、中学校、小学校だけではなく、書店、図書館、語学教育機関、一般企業、地域イベント、就職活動イベント、商店街、留学生との交流イベントなどで活用されている。

しかし、我々の授業にあっては英語授業におけるビブリオバトルであるから、英語で質疑応答を展開するだけでなく、書評を英語で書くという2種類の「英語で発信する力」を発揮する場である。

本稿は学年末に3年生41名を対象に実施した、多読活動における「読むこと」と「書くこと」に関するアンケートの結果を報告するとともに今後の活動の方向性、具体的には多読を通しての「書くこと」の指導の在り方について考えるものとなっている。アンケートは「読むこと」は多読活動による学生の英語に対する意識変化や活動によってもたされたことについて、「書くこと」は読んだ本の内容と感想を、2分間で伝える長さの英語で書く作業に対する意識を読み取るものとしている。なお、アンケートの回答様式は1. 思う 2. やや思う 3. あまり思わない 4. 思わない、の4段階スケールを用いている。

1 多読活動への姿勢について

はじめに設問【1】として多読活動に意欲的に取り組めたかどうかを聞いている。結果は次のとおりである。

設問【1】の回答

選択肢	人数
思う	14名
やや思う	23名
あまり思わない	4名
思わない	0名

* 教養科 Division of Liberal Arts

2 内容を読み取る力について

設問【2】では「多読の3原則」(注)に則って読み、分からない語に遭遇しても意味を推測して、筆者の伝えたいことやストーリーの概要を把握できたかどうかを聞いている。結果は次のとおりである。

設問【2】の回答

選択肢	人数
思う	14名
やや思う	22名
あまり思わない	5名
思わない	0名

【1】と【2】の回答結果から分かることは、ほとんどの学生が活動の目的を概ね理解して受け入れ、目的に合った活動ができてきていることである。また一般に目的意識を持って活動する者の存在が多ければそれだけ全体の活動に良い雰囲気をもたらす。したがってこの集団の活動環境もおおむね良いものであったと確信できる。

3 読むことへの関心について

設問【3】では英語で書かれたストーリーを読むことに興味を覚えたかどうか聞いている。結果は次のとおりである。

設問【3】の回答

選択肢	人数
思う	14名
やや思う	16名
あまり思わない	10名
思わない	1名

ここから7割以上の学生が自分の読み方に何らかの気づきがあって適切なレベルを判断でき、その中で自分の興味・関心に合った選書ができてきていることがうかがえる。

4 読む速さについて

設問【4】では年度初めと比べて多読用図書を読む速さ

が増したと感じているか聞いている。結果は次のとおりである。

設問【4】の回答

選択肢	人数
思う	10名
やや思う	25名
あまり思わない	6名
思わない	0名

ここでは「思う」と「やや思う」と回答した学生数に注目したい。ここからほとんどの学生が多読を通して自分自身の英語力の伸長を実感できていることがうかがえる。

5 教科書の英文に対する意識について

設問【5】では以前と比べて教科書教材の英文に取り組みやすくなったかを聞いている。

この項目を設定した理由であるが、対象学生の総合英語の教材はウォールストリートジャーナルやナショナルジオグラフィックや英語使用者が読む著名人のエッセイや自然科学の不思議についての記事を集めた、日本語使用もないテキストである。これは、英語の構造上の規範を扱うことを目的のひとつに編集された検定教科書とは、読み方のアプローチもボリュームも異なり、初めは分量や学習の仕方に戸惑いもあったと想像されるからである。結果は次のとおりである。

設問【5】の回答

選択肢	人数
思う	5名
やや思う	24名
あまり思わない	11名
思わない	1名

結果から7割程度の学生が取り組みやすさを感じていることが分かる。これは海外の記事などに対する『難しい』という先入観や抵抗感がいつまでも存在するのではないかという懸念を払拭するものであり、これも英語の基礎体力をつける教材としての多読の効果ではないかと考えられる。そしてまた多読を継続している集団には補助教材に

英字新聞や海外の雑誌を授業に導入しやすいことが推測できる。

6 英文読解に対する意識について

設問【6】では対象学生のこれまでの英文読解・長文を読むことに対する苦手意識の有無を聞いている。結果は次のとおりである。

設問【6】の回答

選択肢	人数
ある	12名
ややある	19名
どちらかといえない	10名
ない	0名

31名が英文読解・長文を読むことにある程度の苦手意識を持っていたことがわかる。こういった集団が設問【5】の結果に表れているように教材の英文への取り組みやすさを感じていることも、様々なジャンルの多読教材に触れることの効果であると思われる。また、この「ある」と「ややある」と回答した33名の学生のうち、6名の学生が多読活動によって英語を読むことに対する苦手意識のレベルが下がったと回答している。

7 多読の有用性の意識について

設問【7】はそこまでの設問を通じての各々の多読活動の振り返りとなるが、「平易な英語で書かれた本を沢山読むこと」が自分自身の英語学習に役立つと思うか聞いている。結果は次のとおりである。

設問【7】の回答

選択肢	人数
思う	21名
やや思う	18名
あまり思わない	2名
思わない	0名

ここでの結果も設問【3】で述べたように、自分の興味・関心や読む力にあわせて選書することができていること、

結果としてその時々で自身の英語力や読み方の変化に気づいていたことが想像される。

8 書評を書くことについて

最後に、冒頭で述べた「英語で発信する活動」、すなわち読んだ本について理解したことや感じたことを織り交ぜて英語で書評を書く作業が有意義であったかを聞いている。

また記述による回答欄も設けたので、「思う」と「やや思う」の回答に記述があったものの理由を、内容から①語彙・語法について②作業そのものについて③読む力についての3点に分類した。それぞれの結果は次のとおりである。

書くことについて

選択肢	人数
思う	12名
やや思う	25名
あまり思わない	4名
思わない	0名

記述回答

①	・辞書を使って表現を探す機会になった ・英文法や語彙の復習になった	18件
②	・うまく伝わるように流れを意識して書く機会になった ・自分の意見を書く経験となった ・書いたものをしっかりと読みなおす機会になった	17件
③	・書くことで本の内容に対する自分の理解度を確認できた	5件

設問【5】でも触れたように本校の1、2年次の授業は検定教科書を用いて進められている。検定教科書は「リーディング」が巻末に用意されていることもあって、扱う時期も年度末になる。この時期は1年間の総復習に時間を割くため「リーディング」で感想を述べ合ったり英語で書いたりする活動に時間を確保できない。おそらく対象学生にはストーリーに対する自分の考えや感想を整理して文書化することは極めて新鮮であり、自分の表現力を試そうという意欲を駆り立てるものであったであろうということが結果から想像される。

まとめにかえて

ここまで設問ごとに考察してきた多読活動に対する学生の意識や姿勢を「英語を読むこと」と「英語を書くこと」にわけて整理して、それを基に多読活動の有用性を確かめながら読むことから書くことに繋がる指導について述べたい。

読むことについては、おおむね学生は目的を明確にして多読活動を行っている。そのため自分でレベルや読む力を判断して選書ができ、そして内容が理解できていること、また多くの学生が多読図書を読む速度が増している実感したり、新しいタイプの教科書教材も抵抗なく読み進められていることが把握できた。ここから分からない単語に遭遇したり分かりにくい箇所があっても難しいと思ったり、少し前に戻って意識的に文の構造を分析して日本語の構造にあてはめずに英文を読む力が備わってきていることが想像される。

また英語に対する苦手意識を克服した学生もいるが、この苦手意識は概して英単語暗記に起因するものである。実際、英語学習に苦勞している者から「単語の暗記が苦手だから。」という声を頻繁に耳にする。言語を学ぶ場合に「理解」と「暗記」の両方は欠かせない。おぼえた表現や語彙がどのように日本語訳のように捉えられるのかまで理解せず、試験の前に語彙の丸暗記に徹しては満足できる学習とはならない。そこで多読という学習方法によって英文の読み方を変えることはそれまでの学習方法の見直しと苦手意識の軽減に有効であろう。

書くことについては、それまで培ってきた英語の知識を使って英語で表現することに意欲や関心の高さが感じられた。ここには、それまで経験しない「ある程度の長さの英語を書く」という作業に自分の英語力を試そうとする気持ちに加え、書評を書く本が自分で選べることによる取り組み易さと、自らの体験や思いなどを織り交ぜる楽しさがあったと推測される。この取り組み易さと楽しさは書く作業に対する意欲を持たせることができる。

さいごに英語を書く指導を考えるにあたり、読むことと書くこととの関係を確認すると、日本人学習者が英語を書くときはいったん日本語で考えて、その日本語にこだわって英語化している。しかし読むことの部分で触れたように、多くの者は活動中に頭の中で日本語に変換しなくなっている。英語を書くときにも同様に英語の発想や構造で書くという意識を目指したい。それには、やはり沢山読んで、よく目にする英文や表現を蓄えて、書く作業にてそれらが自然に頭に浮かぶまでになることだろう。

そこで今後も大量に読ませ、英文の構造を分析したり各

語彙に日本語の意味をあてはめたりせず英文で捉えて読みすすめる習慣を身につけさせたい。そしてその習慣がもたらす英語の発想力を活かした英文を綴る活動を通じて、英語の表現力を豊かにさせていきたいと考える。

(注)

「多読の3原則」とは 1. 辞書は引かない 2. 分からないところはとばして読む 3. つまらなければ、その本をやめて他の本を読む（楽しく読む）である。

参考文献

[1] 谷口忠大：『ビブリオバトル』, pp.15-16, 文春新書, 2013